　空間が燃えている。眼下の炎が煌々と照らす中央軸はその輝きを失い、第3層最大の特徴たる曲面を為す建築物の層は、今や霧に隠されることなく天井部まで露になっていた。

　S-III上空を飛ぶAV内。第3層は恐らく最も残骸の道らしい空間である———その実体がオニール・シリンダーであることを明確に示す、曲がり上がって空へとつながる地面。軸と垂直な経線によって東西南北に分割される第3層で、Sは勿論南、即ち図示される際には常にしたとなる側である。

　その地上側入り口から3番目。燃え盛る朱の中にあって、唯一青い光を放つ庁舎タワーの頂上でそれを示すホログラムが踊っている。

　眼下にはブラックアウトの黒に飲まれ、時折爆ぜる橙の彩色に暴かれる超過密の高層建築群。巨大で曲率を感じさせない第3層も、ここまで上層となれば流石に曲面を感じざるを得ない。

　低重力———もとい遠心力———をいいことに建設された、異様に「細い」巨塔と、空中で絡み合う回廊の群れ。ペデストリアンデッキは数十に及ぶ層を成し、サーチライトをもってしても最下層まで見透かすことなど不可能である。

　もしCAがさらに無秩序に成長していたらこうなっただろう。九龍城塞が水平に増殖して更に垂直進化したような建築群を見下ろし、は些か辟易とした感情を抱いた。

　せっかく別宇宙に来たと言うのだから、何か変わっているはずだと思ったのに、更に悪化する方向にしか進んでいないように見える。おまけに、自分が付き合っているのはこちらに来る前にも関わり合いになったことの多いコーポの残党のような連中だ。

　…ともかくミッションに集中しよう。面白い絵面が見られるはずだ。かつての大規模アタックの全てが頭をよぎる…揺れるマトリックス、乱高下する株価、彼が世界に与えてきた地震動の数々。

　前の地球と比べても、ここはアリーのフィールドとしてよりふさわしい世界だった。強大な力を持つ魔術師たち。世界の企業は彼らを中心に成り立ち、彼らによって操られ、彼らによって倒壊する。ここには何の能力も持たないのに頂点に立つ、吸い上げるだけの金の亡者はいない。吸い上げるのは有能力者なのだ。完全な実力主義がそこにはあった。

　「E-IIIだ。庁舎は避けろ、通信が飛んでくる」

　AVのシートにふんぞり返る男が言う。それを聞いたAIパイロットは進路を右上へと変え、AVは曲がった重力場に従って、高層建築の屋上を舐めるように、Cの字を描いて飛んでいく。

　暇だ。阿鼻叫喚を見ることで多少紛れるが、見ているだけと言うのは面白くない。かくなる上は、自分の監視役として来たこいつで紛らす他ないだろう。

　「タオ、この光景を見てどう思う、五言絶句でも読むか」

　「駄目だな、一切感情が統一されてない。叫びに秩序がない。恐怖以外も色々混ざってやがる」

　この男、タオ曰く、どうもこの騒ぎを喜んでいる連中がいるらしい。五言絶句を読めるほど美しい状況にはないということだ。趣味が合わん奴だな。

　「それこそいいんだろうが。何だ、下層住民か何かが喜んでいるのか？」

　「知るか、居てもここまで聞こえてこないだろう。何が発生しているか俺が知るわけない。」

　タオの方は状況の後始末の方を考えていた。第3層の混乱の収拾は3日もすれば付くだろう。しかし地球側は、4層と3層の間に横たわる術壁を失っている。ここはいずれ、大規模な諜報戦のグラウンド・ゼロとなるはずだ。4層の状況が拡大するわけである。ここもあの軍事勢力の支配地になるかは不明だが、傭兵があふれる状況は逆からすると都合がいい。

　1週間前、唐突に第4層と第3層の間に横たわる魔術防壁———あるいは「セキュリティゲート」が破れた。地球側が逆の人間、特に傭兵と企業関係者を通さないために張っていた、個人識別の防壁は何の前触れもなく、唐突に、跡形もなく消え、そこにはこれまで逆側からの侵入を「裏」を介したルートを除いて拒み続けてきた、第3層市街が多くの秘密と共にその脇腹を見せていた。

　エージェントが雪崩を打って侵入したのは言うまでもない。地球側との諜報戦を繰り広げながら、市街の詳細なマップを作り上げたエージェントは、遂に下層住民から重要情報を拾い上げた———の拠点。腐った頭の魔術師どもの巣窟、そしてその中に転移者が軟禁されている可能性がある。

　宿敵たるかの結社の拠点を追い詰める重大任務に、逆は切り札を切った。それがアリー…特異的PAB能力「アストラル」の三重保持者で、転移前は世界的に著名なネットランナーだった男だ。

　タオはアリーと転移前から関りがあったソロとして、アリーの監視役となってこの任務に参加した。主にはアリーが暴れ過ぎるのを阻止するのが仕事だ。この男はその能力にしても性格にしても、大量破壊兵器を持ったテロリストそのものなのであるから、任務達成の障害となることがないよう、常時監視して吶喊させる時を選ばなくてはならない。尤も、この作戦ではその役割は大して必要ないはずだ。何しろ神経膠に関してはが第一方針なのだから。

　煌々と燃える街に照らされた男の横顔は、転移直後よりよほど精悍で、身体全体は筋肉に覆われていた。アリーは自分が授かった能力を見て、ネットランナーからスタイルを変更した。勿論ネットランニングもするが、今やどちらかと言えばソロに近い仕事の方が多い。

　今回もどちらかと言えばソロ臭い仕事だ。神経膠が脱出するまでの間に拠点の場所を特定、入り口のセキュリティを落とし、侵入してできる限り多くの転移者を救出する。

　ミッションクルーはパイロットを除き3人。畏怖を持って捉えられるほどの魔術結社に侵入するにもかかわらず3人しか居ないのは、大人数連れて行くとアリーからFFを食らうからである。つくづく救出任務何て向いていない男だが、逆の有する戦力としては最強である。可能ならば聖女を誘拐あるいは処刑するという副次目標をも追っている頭の足らない錆鷲の上層部からすれば、これ以上ない戦力を投入したつもりなのだろう。

　眼下のシリンダーは右へ回転していき、徐々にスポットが近付いてくる。タオはオプティクスを通じて、「入口」と報告された地点を捉えた、が、それはオーヴァーレイに表示されているだけで、実際の入り口はどこにも見えなかった。ただ四方をビルに囲まれた小さなバスケットコートが存在するだけである。それも、かなり寂れている。

　「こんなところに天下の神経膠の拠点が眠ってるとはなァ…

　さっさとアバズレどもを蹴散らしてやるか。あのムカつく白頭もな！」

　「おい待て、周辺を確認してから…！」

　「んなもんもう確認したに決まってんだろォッ！」

　聖女への殺意に滾りながら、アリーは先んじてAVから飛び出した。

　遅れてタオがAVから飛び降りる。

　残された、タオとアリーが会話する間ずっと沈黙し続けていた女は、何の前触れもなく飛び降りたかと思うと、音もなくバスケットコートに着地した。

　「か」

　「おうとも、タオよ、この残骸の道は全体が異常みたいなもんだが、こいつは酷い…